復興・環境再生に向けた地域との協働の在り方

（実証事業を通して、地域との共生の視点から）

震災以降、福島県飯舘村に専門員として派遣協力している経験と現状から、一部を報告します

飯舘村　産業振興課　専門員

国立研究開発法人　農業・食品産業技術総合研究機構　農業環境変動研究センター

万福 裕造

manpuku@affrc.go.jp

誰が見る資料なのか？

日本の高齢化率、世界最高（2019）

65歳以上の高齢人口　28.4%　推計3588万人

説明会等に出席される方に、<u>わかりやすい資料の作成</u>

- 限界集落とは、過疎化などで人口の**<u>50%以上が65歳以上の高齢者</u>**になり、冠婚葬祭などを含む社会的共同生活や集落の維持が困難になりつつある集落を指す。

存続集落、準限界集落、限界集落、危機的集落、超限界集落、廃村集落消滅集落

例えば説明会で、聴き慣れない言葉への拒否感

- 放射能、ベクレル、シーベルト、グレイ
- コロナ、ロックダウン、オーバーシュート
- ワイズ・スペンディング、セーフシティ
- サステイナブル、スプリングボード
- ステイクホルダー、ベネフィット
- ダイビングミノー、フィネス
- 畝、反、町、寸、間、尋

わからない言葉を並べられたら聴きたくない！

例えば誰から説明を受けるか

- 議員、首長
- 国家公務員、県・市町村職員
- 大学教授
- 医者、弁護士
- 親戚、親、兄弟
- 信頼できる友人
- ネット情報、マスコミ情報

信用できる者からの話は、受け取りやすい

大規模な説明会への不満

- 大きな声に流されてしまう、質問できない
- 意見する時間がない
- リスクコミュニケーションと住民説明は違う
- 事業の同意と、事業の協働は違う
- 説明を受ける側にとって、解釈が難しい言葉の連続
- 説明等の趣旨が関心事項とずれている
- 平日の昼間に開催して欲しくない
- 年代別に考えることは相違がある

人と人は距離感があることを認識することの重要性

飯舘村での事例

- 農地除染実証事業、栽培実証事業（放射能への不安・・）
- 住民説明会全般（補償賠償、生活保障・・）
- 太陽光発電事業（用地取得、法手続きに関係する省庁・・）
- 仮設焼却炉事業（地元地権者、関係市町村、村内全域への説明、放射能への不安・・）
- 木質バイオマス発電、熱利用事業

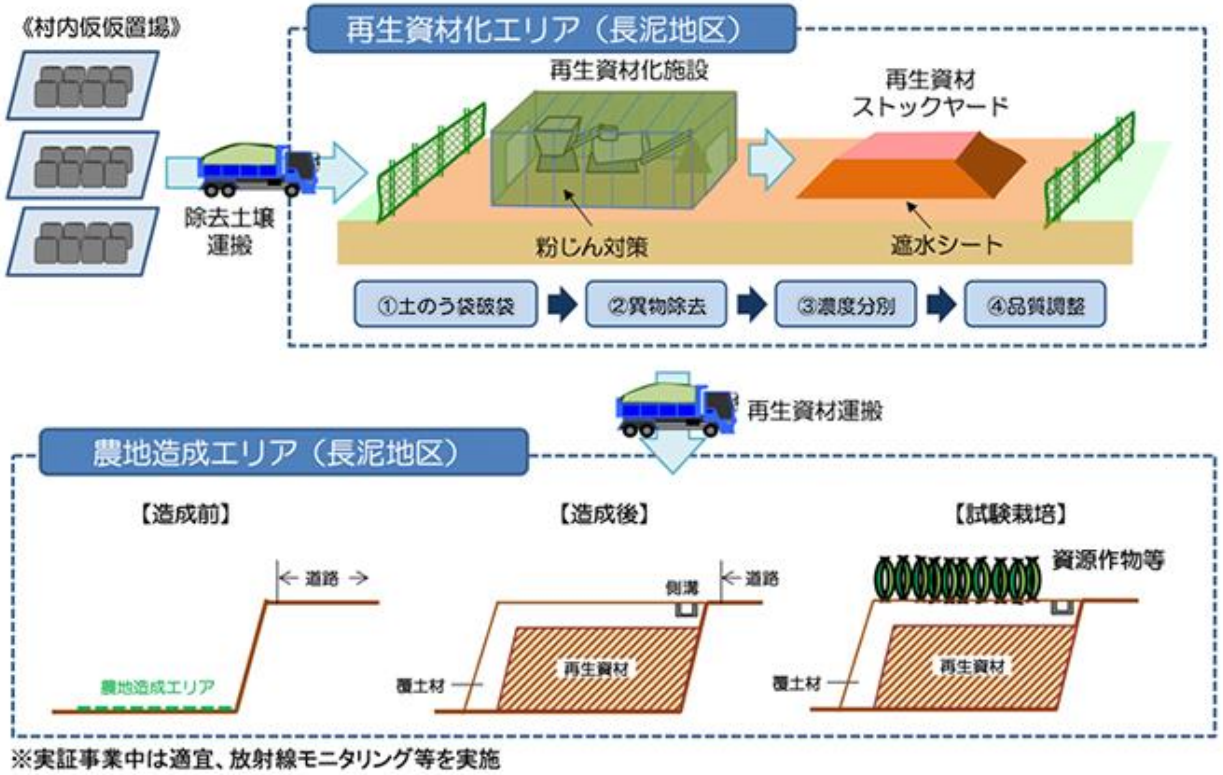
（地元地権者、関係市町村、村内全域への説明、放射能への不安・・）

- **少人数での協働と理解活動**
- **括りを見つけることの重要性**
- **同意は一度とっても、維持する方が難しい**

全てにおいて共有する事項は無し、丁寧な対応と協働のみ

環境再生実証事業（飯舘村長泥地区）

- 地域住民の理解を優先・地域の要望を反映させつつ、村内仮置場に保管されている除去土壌を再生資材化し、緑化造成（農地）の実証事業を実施中。
- 具体的には、村内仮置場の除去土壌を再生資材化施設において、大型土のう袋の破袋、異物除去、放射能濃度分別等により再生資材化。



資料参考：環境省情報公開　　中間貯蔵施設情報サイト

資料参考：環境省情報公開　　中間貯蔵施設情報サイト

協働の成果は、本当に伝わらない・・・・

繰り返し住民との対話・協働

1）除染で発生した除去土壌（時間的経過による減衰）
2）長泥で開封、雑物除去（5000Bq/kg以下）
3）造成の基盤に利用、非汚染覆土
4）栽培実証等の結果を事業に活用

マスコミ公開での住民の発言の一部

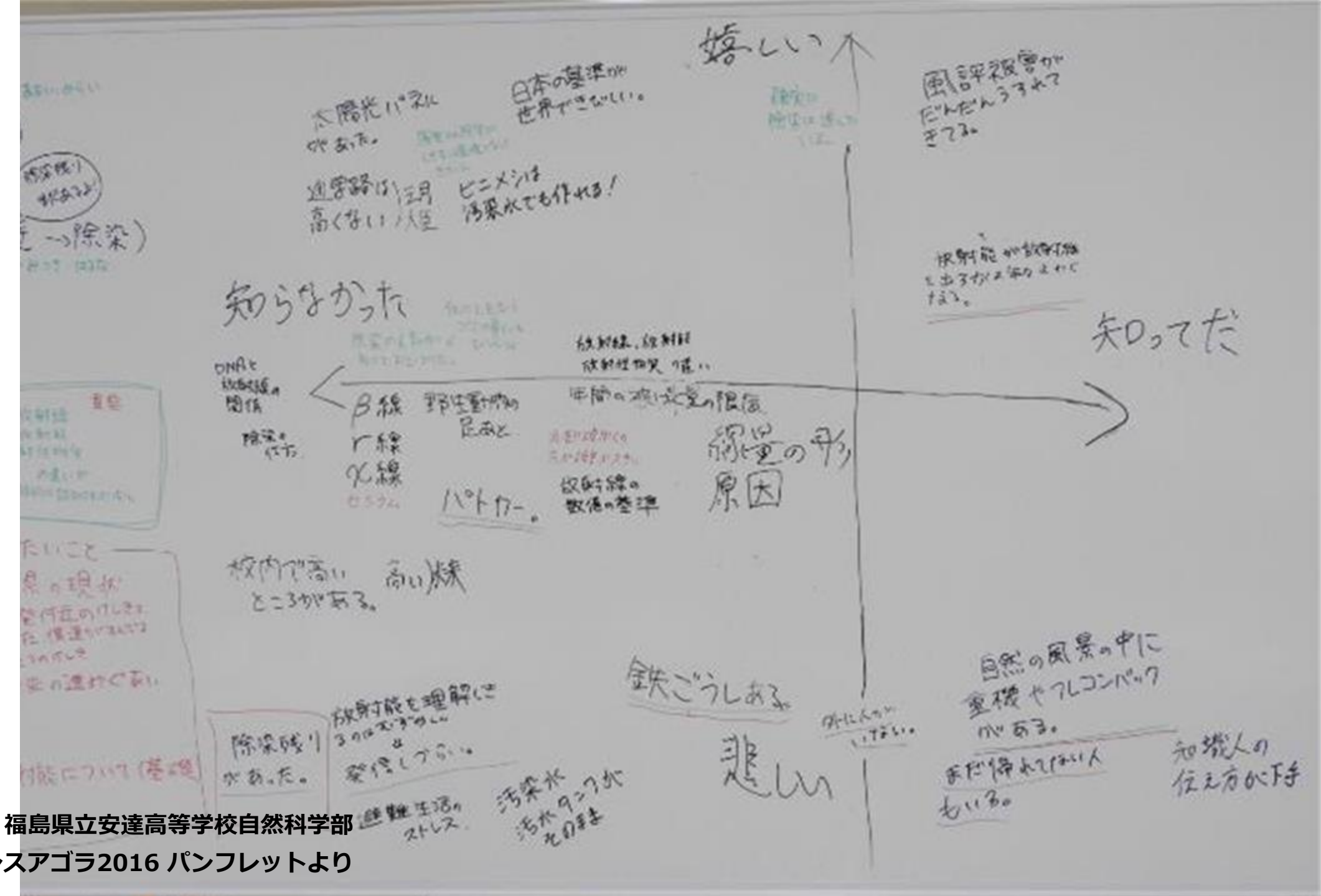
- 帰還困難区域のモデルになればいいし、汚染土壌について考えるきっかけになればいい。
- 彼ら（環境省、飯舘村）を信頼してやっている。
- 前を向くために、将来のために受け入れた。

メディアなどの情報

住民が知りたいこと

行政側（状況把握・対応、説明会等）

研究者の視点・関心



福島県立安達高等学校自然科学部

サイエンスアゴラ2016 パンフレットより

御清聴ありがとうございました。
表現に濃淡がありますので、ご理解頂ければ幸いです。